

てからは、満州の話や兄たちの話をすることは全くなかった。思い出すにはあまりにもつらい出来事だったのだと、私たちもそのことを母の前では口にしないようにしていた。ひたすら私たちや孫たちのために、その成長を喜び、死の二十日前まで食事の支度をしていた気丈な母であった。二十日ほど床についた後、昭和六十年八月夏の暑い日に、静かに息を引きとった。八十四歳の生涯であった。

父はその後も元気で俳句に精進していたが、白寿となつて自分で記念句集を出し、家族や俳句仲間に祝ってもらつてから急に弱つてきて、平成八年二月記録的な大雪の中、九十八歳で静かに命を終えた。

両親にとつて大変厳しい生涯であつたと思うが、思い返してみても、私には自分が兄たちの分も、親孝行したとは思えない。唯一親孝行をしたとすれば、それは私が夫と結婚したことではなかつたかと思うのである。夫は忙しい中を暇をみては、父の碁の相手をしてくれたり、母の病気のときや手術が必要なきなど適時適切に、すべての手配をしてくれた。苦勞をしてきた両

親に心の平安を与えてくれた。親たちも大変感謝をしていた。私も両親を姉や兄たちのもとに送り届けた今、夫に心から感謝している。

流浪の旅から入植まで

岩手県 及川 正一

激動の昭和も幾多の思い出を残して過去のものとなり、その昭和史には軍部の台頭、そして大東亜戦争という日本の存命をかけた忘れられざる時代があつた。終戦後は国民一人一人の忍耐と努力などによって国の再建に取り組み、平和をスローガンに各自が額に汗、手に豆して働いた甲斐あつて、逐一経済的復興と併行して、廃墟と化した日本の国土も日一日と復興し、ついには経済大国といわれるまでになった。

そもそも、私が満州開拓に参加しようとしたのは、高等小学校卒業の年であつた。我が村（江刺郡梁川村）からはすでに内原訓練所の第四大隊副官（後に

満州鉄驪大訓練所の訓練部長)の菊井清人先生や義兄の平野雅保氏(後に内原訓練所会計課長)等が満蒙開拓に参加しており、彼らが村に帰っての満州話と、この三月に先輩として七人(後哈川訓練生)が義勇軍に参加したことで、私の満州熱はますます加熱した。

当時、次男・三男の職場は、軍需工場か、または大陸進出の二者択一の時代であった。小柄な体の自分は、体力的に軍需工場は不向きと判断して、兄を再三説得し、許しを得て義勇軍を志願し、茨城県内原訓練所に入所した。時に昭和十三年五月のことであった。

短い期間であったが、内原訓練所では、朝は大和体操と四〜五キロメートル程度の駆け足、日中は建設途上とてほとんどは土木作業であった。週一度ぐらいは各大隊総動員、その数およそ一万人近くがあの大広場(練兵場)に大集合して、訓練所長である加藤完治先生の訓話を聞いたものだった。内地訓練の課程も無事終了して、昭和十三年七月十五日、日本海を渡り哈爾濱訓練所へ入所した。

同年八月二十四日、嫩江大訓練所に移動した。嫩江

大訓練所は、私にとって生死をも論じる大病を患った場所として忘れられない所である。同じ年の十月中旬ごろだったか、自分たちの宿舎(未完成であった)の中で天井を仮の寝床としていた。床暖房用のオンドル(泥でレンガの大きさの物をつくり乾燥させ、それを組み合わせて煙道を作り、冬、野草または薪をたいて暖をとる)を乾かすために火が入っており、湿気やら煙やらで体調を崩し、嫩江訓練所の本部病院に友の機で運ばれ入院した。中隊長も初めての死人かと案じながら、服装を正しての入院付添いだっらしい。私は昏睡状態が続き、それが三日なのか七日だったのか今もって不明である。幸運なことに、病院関係者並びに中隊関係者と同郷の先輩たちの必死の看病で、私は一命をとりとめ再起ができた。

昭和十四年六月二十三日、興安南省の大和鉄道白警村訓練所へ移動、入所した。この大和訓練所こそ、私の生涯にとって大きな変化を与えた所である。それはちょうどノモンハン事件の最中であり、関東軍の精銳の大半が支那戦線の総攻撃作戦準備とかで出勤中で、

したがって、ノモンハン戦線が兵員不足となり、急遽満州国軍、特に原隊に近い興安蒙古騎兵隊を前線に派兵した。それが裏目に出て、戦線激化とともに戦線離脱組が群をなして現れ、指揮官の日本人将校を射殺して国境を越え、その逃避部隊が我が訓練所のすぐ前の国道を夜明け前に通過せんとして、訓練所衛兵に誰何され、彼らが一方的に襲撃してきて、訓練生一人戦死、三人重傷の犠牲者を生じた。その犠牲者の中に不運にも私が入り、左膝関節盲管銃創を受け、現地索倫診療所へ収容され入院した。このころから、索倫地区へのソ連機の爆撃が頻繁になり、そのため安全地である奉天の医科大学病院に転院した。翌十五年春、これ以上の治療を断念して友の待つ大和訓練所へ帰任した。訓練所では本部の雑務を幹部の下で指導されながら仕事をした。

昭和十五年暮れ、内地療養の命を受け帰国し、激変する国際情勢を一喜一憂して見守り、十六年十二月八日、ついに大東亜戦争開戦のニュースを、今の岩手県江刺市内で聞くこととなった。そこで、自分もこのよ

うな不自由な身になった以上は職を探すとて至難であり、一番よいのは原隊の開拓団に復帰することと決心して、現地開拓団と再三にわたり便りの交換をして、十七年五月、再渡満し現地の七道嶺義勇隊開拓団に復帰した。

当時、団には団員二百五十余人が営農に精を出していた。戦争も年々苛烈を極めて、年ごとの徴兵検査後には心ならずも団を去って入営する人々が増え続けた。戦争も終盤を迎えた昭和二十年前半は、稼働団員も極度に減り、農作業も手抜き管理方法で行われ、秋の収穫を心配するむきもあったが、それどころではなかった。

二十年七月末の根こそぎ動員では、征く者も残る者も悲壮な別れをして、お互いの健在を祈るのみであった。

本開拓団は岩手、長野、愛知、滋賀の混成開拓団で、団長遠藤威文（応召中）、営農指導員伊藤義一（応召中）、警備指導員奥野勇（応召中）、青年学校教諭小野寛一（在団、団長代理）らの幹部が在籍していたが、

昭和二十年八月当時、在籍人員三百余人のうち在団総人員は婦女子を含めて約四十人であり、正団員はわずかに十五人であった。

そのような中、昭和二十年八月十日午前、開拓団本部で緊急防衛会議と銘打って、小野寛一団長代理を中心に残存団員すべての十数人が集合した。

午前十一時ごろ、全く思いがけないニュースが、木沢団員から飛び込んできた。緊急防衛会議の席上、齊^{サハ}ハ^ルから派遣された係官は、関東軍の健在、防衛施設の完璧すなわちドイツのマジノ線並みと豪語、力説していたが、当日病氣療養中の木沢団員が、十余キロメートル北方の東洋一の航空基地の八家軍医（復員後姫路市で開業）に診察してもらいに行き、その時軍医から聞いた情報を防衛会議にもたらした。「軍は八月十日正十二時を期して全施設を破壊し南東の通化に行く。すでにソ連軍の空陸部隊は国境を越え、すぐそこまできている。開拓団は急遽全員南下せよ」という情報であった。この報により指導員伊藤義一先生の奥様は、実姉のいる齊^{サハ}ハ^ルに向かつて出発した。

木沢団員からの情報は、一度には信じ難く真偽を巡って両論対立し、加えて齊^{サハ}ハ^ルからの係官も前言を翻したので、ますます不安が募り始めた。そのころ、黒っぽい飛行機が一機、団本部上空を旋回していた。我々は味方機と思いい手を振ったが、何事もなく、今もって謎となっている。やがて正午十二時、北方を遠望すると木沢団員の情報どおり黒煙濛々、それが次々に広がり、やがて東洋一の飛行場の全施設が爆破され、視野のきく限りが火の海となった。

時を同じくして、西部国境方面の防衛線構築に大動員されていたであろう苦力の大群が作業離脱して、何百何千の逃亡の姿があった。数十キロ遠く西北位にある興安（王爺廟街）をソ連機が爆撃し始めたらしく、遠雷のような響きが身近に伝わってきた。

平和だった開拓団も、未知である先行き不安の戦乱に直面していた。

小野団長代理は、八月十日夕刻、洮南県公署に連絡のため騎馬で、鎮西駅經由洮南に向け出発した。鎮西駅前弁事所の戸沢団員は、夜の小雨について早馬で連

絡に帰団した。小野団長代理からの連絡第一報は次のとおりであった。「団は本部並びに周辺の倉庫などを焼却して、明朝（八月十一日）午前八時の列車に全員乗車すべし」。

既に、各部落の残存部落民（そのほとんどは婦女子）は、本部近くの三部隊に集結させてあったので、婦人たちは弁当の炊き出しに忙しく、また来るべき厳しい冬に備え、越冬用品の最小限の品々の整理などに夢中になっていた。雨は容赦なく降り続いていた。いら立つ人々の準備もはかどらない。やがて八台の駄車に最小限の荷物を積み、数人ずつ家族を分乗させ、各駄車に二人の武装団員の警護をつけ、最後尾に騎馬武装団員を配置して出発した。八月十一日午前八時までに鎮西駅に到着したいのだ。昨夜の降雨で泥濘悪路、一同馬に鞭打ち、駄車をとばした。激しく揺れ動く駄車に振り落とされて打撲した団員もいた。引き綱が切れて困っている駄車を捨てて、先着した駄車の帰路の空車（馬は駅到着後自分で団へ向かって帰路につき習性あり）を捕えて乗り移り、再び駅に向かって引き返し事

無きを得たりもした。

私たちの駄車の列が駅近くなったその時、西方はるか葛根廟方面から、私たちが乗るべき列車が白い蒸気をいっぱい吐き出し轟進して来るのが見えた。夢中で馬に鞭打ち駄構内にやっと滑り込むことができた。貨車に全員収容、荷積みを始めたころ、機関士がソ連機の来襲を告げ、我々を「早く早く」とせき立てるので慌てた。荷物全部の収容は不可能と判断して、長い年月、団員が特別に世話になった満系駅長・駅員たちに荷馬車全部の処分を一任して時間を稼ぎ、やっとの思いで発車に間に合った。

貨車に婦女子を乗車させるには大変な苦労があった。我々の乗る車両は無蓋貨車で、構内といっても旅客ホームを外れており、また大陸の貨車は地面から驚くほど高い。それでも必死に中から引っ張る者、下からお尻を押す者、遠慮やきれいごとを言っではいられない。やっとの思いと駅長らへの荷物全部の処分一任も効果があり、全員貨車内に収容し終わったとき、本当にソ連機が西の空高く舞い飛んでいた。駅長も涙して我々

一行との別れを惜しんでくれた。

遠藤団長の娘由美子ちゃんを迎えに行った鈴木団員は、奥地の開拓団への連絡使命を終え色々なことで出発が遅れ、由美子ちゃんを収容して鎮西駅から四キロメートルほど離れた四部落の丘まで来たとき、我らの乗ったであろう列車の発車汽笛を聞き、ガックリして遠く見送り号泣したと、後日再会したとき話してくれた。

鈴木団員と由美子ちゃんは流れ流れて通化に至り、親切な日本婦人に由美子ちゃんを託して、鈴木団員は常に由美子ちゃんのことを監視しながら日雇い労務で冬を越した。二十一年春ごろから引揚げの話が度々話題になるようになった。由美子ちゃんの住む街方面の引揚げ実施の報に接した鈴木団員は、臆せず急ぎ通化駅に行き、由美子ちゃんたちの町民であることを確認して、垣根を破ってホームに進出し、その引揚げ列車に証明書なしで乗り込み、隅から隅まで探して由美子ちゃんを見つけることができた。流れて壺蘆島經由引揚船にもぐり込み、私たちがお母さんよりも早く帰国

していた。博多に上陸した鈴木団員は、まだ復員していない遠藤団長の出身県庁に行き、団長の叔父さんを探し当て、由美子ちゃんをお願いして彼の郷里愛知に帰った。

我々七道嶺開拓団の一行が鎮西駅をたつ時、今日まで各部落で飼っていた愛犬のチビ、フジ、ミチらの犬は鉄道線路の真ん中を走るもの、また線路脇を走るものなど様々で、列車に追いつがって声を限りに吠えていた。姿が小さくなり、ついに視野から消えるまでの別れが強く印象に残った。

白城子駅頭（白城子駅は四平く齊齊哈爾間（平斉線）の要衝であり、西北国境方面に走る白杜線の出発駅でもある）で小野団長代理と無事合流することができた。小野さんの近親者である停車場司令部の方を交え、南下作戦を策するも、乗車見込みは二時か三時とあいまい。したがって白城子駅での五時間あまりを次のように過ごした。

この駅で南下する列車を待ち続けるも、どの列車も避難民でいっぱいであり、したがって私共一行は乗車

不能。常套手段では乗車不可能と判断して待っている
と、病院列車がホームに滑り込んで来た。見ると白衣
の兵隊さんは定席だけのゆっくりとした様子なので、み
んなと凶り、デッキでも非常の場合だから許してもら
えると勝手に判断して乗車を始めたら、軍医少佐らし
い軍人さんが血相を変えて、「貴様たち誰の許可を得
て乗った。早く降りろ。急いで降りろ。さもなければ叩
き切る」と言って、軍刀の柄に手をかけ本気になって
怒ったので、一行は逆らわずに全員下車した。

いくら待っても乗れそうな列車が入ってこないの
で各自携行の米を必要な分徴収して、駅前のアジャ
ホテル脇で御飯を炊いた兵隊さんにその大きな支那釜
をもらい受け、一度に一行の御飯を炊き上げることが
できた。これは車中で食することとして、おにぎりに
して携行した。

こうした親切な兵隊さんもいれば、さっきの軍医の
ように肩章に物言わせる人もいたのは、混乱の世相に
あって当たり前ではあったが、平和な今日では考えさ
せられる事件であった。

白城子駅でやっと都合してもらい乗り込んだ列車は
無蓋車で、一般日本人婦女子と老人だけが乗っており、
彼らは暴徒からの難を避けるため小さくなっていた。

しかし七道嶺開拓団である我々は、腰に軍刀、肩に銃
の変な武装集団の一行であったので、列車内の一般邦
人は大歓迎して場所を譲ってくれて、やっと行先不明
の南下無蓋列車の客となることができた。途中、予告
なしに停車した駅では、暴徒の鉤針と槍による荷物の
略奪、投石などがあり、その都度身を伏せた。

日本帝国の存在をひたすら神に祈りながら、奉天難
民第一号列車として八月十四日朝、戦車壕構築中の奉
天市に着いた。満鉄経営である我が団は、直ちに奉天
鉄道総局を訪れ、団放棄の事情を報告し、資金の援助
と食糧の供給方を願い、それらに快く応対してもらい、
人の情を肌で感ずることができた。かつて我が団が懇
意にしていた部長さんも健在だったので、何かと大助
かりだった。早速当日は奉天寺の本殿に収容させても
らい、ひとまず落ち着くことが出来た。

明けて八月十五日正午に重大放送があるとの情報が

あり、直ちにラジオを本殿に設置してもらい、例の雑音の入った天皇陛下自らの終戦の詔勅を聴いた。最初はなかなか聞きとりにくく、ある者は日ソ開戦とか、敗戦詔勅とか、いろいろな判断であったが、論議の未敗戦との結論が大勢を示した。ある者は怒号し、ある者は敗戦を信ぜずに次の行動を策謀する、秘策を練るなど自由闊達に論が飛び交った。

八月十七日、満鉄の計らいで奉天駅前松島町の満鉄官舎（三階建て）の四戸分ぐらいを開放して我々に与えてくれた。また米、味噌などの食糧もたくさんいただくことができた。

八月十八日、この日は衣類と毛布を大量に放出してもらい、越冬の準備が苦しいながらもできた感じがした。

ソ連軍は、八月十九日に軍司令官イワノフ大将が入城し、ヤマトホテルを司令部とした。このころより治安が乱れ、暴徒が群れをなして横行し、奉天市内の日本人経営の店が焼き打ちに遭ったり、昼といわず夜といわず一人歩きは物騒であった。こんな日が約一カ月

続き、治安の良さを求めて、後輩のいる安奉線四台子訓練所に、移動中の難儀をいわず、満鉄の親書を持って訓練所入りをした。この訓練所は水田もやっており、幾ばくかのお米も保有し、すぐ刈り入れも迫っていた。こうした事情を考え、満鉄が我々一行を受け入れられるよう要請したものと思われる。しかし思ったようにはいかぬもの、当の訓練所長は、「すぐ帰れ、米一日食わせれば自分たちが一日命を縮める」と、けんもほろろであった。いずれも頭を低く再三お願いして、お米を少しづつ分けてもらい糊口の足しにした。

この冬はこの場で炭を焼いて町に売り歩き、乏しいながらも収入を得て、一行の活路を夢みて暮らした。昭和二十一年早春、訓練所と決別し貔陽イグサに移動した。ここは終戦前、日本人経営の炭鉱で、日本人宿舎も完備していたが、それはこの時点で八路军の後方病院として姿を変えていた。我々はその後方病院の野菜作りを請け負うべく立ち上り、行動を起こしたのである。最初はなかなか思うような成績が上がらず困惑したが、我慢我慢、そのうちなんとか満足するような品質の野

菓を病院向けに出荷することができた。

野菜作りも軌道に乗り、経済的に苦しいながらも笑いを持った生活ができるかと思つた矢先、合流団長から難問が提起され、知らず知らず合流団の総務をつかさどつていた自分にその難問が振りかかつてきた。それは我が団のある未亡人から直接私にその問題の相談がもちかけられた。宿舍の近くを流れる小川のほとりで、真つ暗な晩のことであつた。静かな夜、時折遠くで犬の鳴き声が聞こえた。

彼女曰く、ある先生から結婚を申し込まれどうしたらよいか迷つてゐるということであつた。私は「世が常であれば祝つてやるべきだが、このような団体生活であり、独身男性の多くの方々に世話になつてゐる現在、しかもこの状態がいつまで続くか計り知れない。したがつて快く祝つてやれないし、賛成する訳にいかない。もしどうしても強行する場合は、ご主人の遺骨を私に渡してくれ。私のご主人の実家に届ける」と言つた。彼女の主人は二十年暮れに四身子で死亡したのだつた。彼女も冷静になり、私の言い分を聞いてくれて、

一件落着かと思つたのも束の間、今度はその先生からの呼び出しがかかり、隣の部屋だったのですぐ行つた。部屋に入るなり大きな声で「及川、おれにうそ言つてゐるな」と言つて頭から怒鳴られた。

私も二十二歳になつていたが、何が何だかわからずに頭から怒鳴られたことは初めてだつた。私の救いは、この先生が和尚さんなるが故、常日頃有り難いお説教をみんなに聞かせていたことで、その説教の中から教えを引用して難を小さくした。彼曰く、「君も年頃だ。

幸い八路病院には年頃の日本人看護婦もたくさんいる。この病院長と俺は友達だ。よい娘さんを見付けてやる」と。私は団体が存続する限りその話は拒否すると言つた。終わりには先生は「三十五歳にしてこれほど恥入つたことはない。謝る」と深々と頭を下げ手を付いて謝つた。そのうちに両者が機嫌を取り合つて妥協する様が見られ、団の空気も良好に推移したようだった。そんな秋の初めごろ、にわかに引揚げの話がどこからともなく伝わり、団員を何かと一喜一憂させる日々が多くなつた。ある日、中共軍の係がきて、老人及び

婦女子を選び、その方々を引揚げ第一陣として指名して、幾日かの間を置いて、今度は健康な独身の者三人が選り残されて、ほか全員が第二陣として安東に向け出発することができた。

安東駅の駅舎内で、それなりの官憲の手続きがなされ、各地からの一般邦人と合流して大隊・中隊・小隊班を編成し、一夜は駅舎内で過ごし、翌日列車上の人となった。列車は安奉線を西に向かつて走り、とある駅からは国民党と共産党との内乱で鉄橋が爆破され、したがって徒歩でその鉄橋を渡ることとなった。次の駅まで国共衝突中とて部落を遠回りさせられ、満人部落で仮寝のたびに金銭を強奪され、女の要求には玄人の方の自発的好意に甘え、やっこのことで共産党側から国民党側の駅に到着し、連絡があったのでであろう待ち合わせの列車に乗り込み、奉天經由何日目かに錦州収容所に入り、様々な手続きをとることになった。

ある日、国民軍の中將だかの將軍が現れて、引揚者団体の班長以上を広場に集め、声高らかに「自分は日本の士官学校を卒業し、この軍刀は恩賜の軍刀である。

いま、蒋介石總統は「怨みに報ゆるに徳をもってせよ」と申しているので、取り調べは簡単にする。中国とてあなたたちを殺すだけの弾丸と銃はある」と言つて我々引揚者団体の幹部およそ百人近くを整理させ、二メートル間隔で銃を持つ兵士が取り囲んだ。あまり気持ちのよいものではなかった。

二、三口錦州収容所で暮らし、壺盧島でDDTのご厄介になり、血を分けた兄弟分の日常の騒ぎも収まり、こんな効き目の薬に驚いたり、感心したりして、アメリカ貨物船上の人となった。

何日間船に乗ったか忘れたが、ある夜数人の仲間から甲板にくるようにとの呼び出しがあり、何事かと甲板にでてみると「おい、今夜先生に御礼参りをしよう」と言う。相当に殺気立っていた。事の次第を聞いてみるに、今までに彼が私たちに与えた屈辱的言動の数々は許せないとのこと、内地に陸前に海に放り込むこととしたので、賛同を得たいとのことだった。そこで私は、どんなにいやな困ったことがあっても、恩を受けたことも事実であるので、黙って許してやれと説得

に説得を重ね、やっと納得してもらい事無きを得た。

懐かしの日本の島々はもう目の前で、ほとんどの邦人はかわるがわるに甲板に出て安堵の色を濃くした。

検疫後、すぐ上陸可能かと思っていたら、船内にコレラが発生し、以後は一週間ごとの検疫によって上陸が遂次延長され、船内は病気に對する緊張と一方であきらめムードが漂い、退屈しのぎに小隊對抗の隠し芸大会などを行い、上陸の日を待った。二、三度の病氣発生により、博多港停泊およそ一カ月、やっと晴れて上陸ができた。船の中で一人五枚のハガキが支給され、まずもって県庁と生家あてに無事博多まで帰った旨を知らせた。私たちより早く復員かつ引き揚げた伊藤指導員から船内に便りがあり、入植地を空けて待っているとの便りに意を強くして上陸することができた。

博多では、予防注射・被服の配給・食糧切符・乗車券などの支給・配給がなされ、やがて郷里に向かって列車上の人となった。途中大都市の痛ましく焼けた残骸の跡にただただ驚き、名古屋も東京も無残な姿をさらしており、戦争の無益であることを痛切に感じた。

列車途中食糧切符も用足せず、里芋の煮物に塩の弁当であったり、国民は食生活にもまだまだ敗戦の後遺症が深い傷として残っていることを実感しながら、岩手県入りすることができた。時に昭和二十一年十二月三日と記憶している。

やがて長旅の労もさめやらぬうちに県庁訪問し、県の係の方々と伊藤指導員に今後の行動を願い、託して帰った。

昭和二十二年、雪解けやらぬ一本木原に同志五、六人と立つことができた。それは開拓入植地の選定のためであり、我々旧開拓団を主軸に、若い旧義勇隊関係者三十人規模で結成する構想をもつての現地調査であった。その後、県開拓課の指導方針などを加味した団の設立方針などを樹立して、県内の旧義勇隊員動態調査票により入植可能と思われる者の人選に入り、直ちに三十数人に連絡したが、実際参加したのは二十余人であった。

その参加者を一本木旧兵舎に招集したのは昭和二十二年早春であった。入植地がなかなか決定せず、した

がってどこで何をやればよいのか計画すらたらず、県庁勤務の伊藤団長との連絡も思うようにとれず当惑したものだ。

県の指導でひとまず仮入植地に腰を落ち着け、自分たちの本当の入植地決定を待つこととした。当時はどこも食糧難の時代であり、草萌える季節を待って、ワラビ採りの専門要員を山野にあげ、ご飯の糧からお汁の実、おかずに至るまでワラビ・フキ・ウルエと山菜一色で頑張った。

そのころ岩手山麓地区の入植者数が適地配分面積をはるかに越え、いわゆる過剰入植が現実となり、現地開拓団の代表者会議でもたびたび問題になり、どうしてもほかに入植地を求めざるを得ないことから、広大な面積を保有している近くの農林省種馬育成所（現在の農林省種畜牧場）用地の解放こそ問題解決につながるとして、早速解放委員を数人あげ、上京陳情も二度、三度。そのかいあって一本木分厩の解放が決定した。この解放用地を県種畜場と開拓用地に配分する両者会合も二度、三度、分厩講堂の一室に火鉢を囲んで深夜

に及ぶこともしばしば、激論も数時間に及んだ。当時は敗戦後日が浅く、官庁との義理的要因が少なかった。また入植直後とて遠慮のない討論がなされ、私もその都度傍聴を許され、血を沸かしたものだ。

敗戦。無条件降伏。日本のすべての人が初めて経験する、全く信ずることのできない事態が生じた。特に外地満州の混乱ぶりは、戦後多くの著書によって知ることが出来る。王道楽土建設の夢破れた私たち義勇隊開拓団員及び義勇隊訓練生は、個人個人の持つありったけの生命力と、その運命とにやっとな支えられ、戦後の酷寒満州に九死に一生を得て生き残った。昭和二十一年五月から始まった故国への引揚げは、まさに史上例のない民族の大移動であった。

大東亜共栄圏の旗印の下、各地域に進出していた一般邦人にとって、引揚げは宮々と築きあげた生活基盤と全財産を一夜にして失うことであった。言語を絶する逃避行の途上、多くの人たちが略奪や飢えに倒れ、数知れぬ悲劇を生んだ。

その中であっては、故国の土を踏めた者は幸運その

ものであったのだ。

満州往還

岩手県 武 村 徳 一

六十有余年の人生を振り返って見て、数奇に富んだ人生であったというほどではありませんが、その土地で生まれ育った同じ年代の人と比べていろいろ体験した苦難の時代もありましたが、今それらの過程を振り返って自分の人生は必ずしも不幸だったとは思いません。山あり谷ありの人生の旅ができたと自分としてはむしろ幸せだったと考えています。

満州移住の動機と終戦前後の生活状況

昭和十五年、当時、長野県は国策とはいえ満州移民が盛んで、私の家のように家族が多く農業は小作地が多いところでした。稲作と養蚕を経営の柱として、その合間に水引きもやっていたことをおぼえています。一年中一生懸命に働いても、年の暮れにはいわゆる小

作米、小作料を払わなければなりません。働いても働いても貧乏から抜けられなかったようでした。そのようなかで満州移民の話があり、私の記憶では特に祖父（当時六十四歳ぐらい）が乗り気になり、家族を説得したようでした。親戚の強い反対もありましたが移民は決まったのです。結局、祖父が先発隊の一員として、昭和十五年の春、盛大な見送りを受けて出発して行きました。

その後、留守をまもる父母・祖母は、翌昭和十六年春には渡満することが決まっていましたので、その準備に明け暮れていました。

いよいよ昭和十六年、住みなれた故郷を離れるときがきました。私は小学校二年生の終業式を終え、三月の末、親戚の方々をはじめ村長さん、近所の方々、友達から盛大な見送りを受け、住みなれた信州上郷をあとにしました。

叔父叔母や友達との別れはつらく悲しいものもありましたが、私は幼心にも希望と見知らぬ新天地に対する好奇心で胸がいっぱいでした。